

様式1 平成 28年度 山梨県立富士見支援学校本校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

学校目標・経営方針	子どもたちの病状に配慮し、健康の回復を図りながら、義務教育における学習空白を補完するとともに、社会の中で人と関わりながら生きていくための力を育む。
-----------	---

山梨県立富士見支援学校校長 石原 一彦

本年度の重点目標	1 児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。
	2 健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、社会に参加する態度を育成する。
	3 病弱児教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。

達成度	A ほぼ達成できた。(8割以上)
	B 概ね達成できた。(6割以上)
	C 不十分である。(4割以上)
	D 達成できなかった。(4割以下)

評価	4 良くできている。
	3 できている。
	2 あまりできていない。
	1 できていない。

自 己 評 価						
番号	評価項目	本年度の重点目標 具体的方策	方策の評価指標	年度末評価(12月20日現在)		
				自己評価結果	達成度	成果と次年度への課題・改善策
1	児童生徒の実態に即した支援や学習指導を行い、一人一人の確かな学力を育む。	合理的配慮を踏まえた個別的教育支援計画を作成し、個別の指導計画に基づいた学習の状況や結果を適切に評価し、指導の改善を図る。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・児童生徒の実態に応じて、教科や学習グループを見直し、児童生徒が心身の状態を整えながら、意欲的に学習に取り組める環境を用意することができた。 ・個々の児童生徒の学力及び学習空白を把握し、適切な評価とともに、学習空白をなくすよう工夫した。	B	・個別的教育支援計画については、件から提示された新しい様式に沿い、規定類集の差し替えを行っていく。 ・評価について、引き続き検討し、次年度に再提案をし、指導の改善につなげていく。 ・校内研究会での授業実践報告や、前籍校への授業参観を通して、授業力の向上につながった。 ・次年度は、今年度の「研究テーマ」と一人一実践の提案という「研究方法」を継続する。「学部全体で取り組む」という体制も継続する。
		ICT教材の活用や体験的活動など、指導法を工夫することにより、わかる喜びを実感できる授業を行い、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・「合理的配慮」や「授業を含めた児童生徒の生活全般にかかわる支援」という視点を設けて、校内研究会において授業実践をまとめ、討議の柱の一つに据えて論議した。前籍校あるいは異校種どちらか1回以上参観する体制に変更し、無理のない範囲で実施することができた。		
2	健やかな心身の涵養とよりよい人間関係の形成を図り、社会に参加する態度を育成する。	教育課程に児童生徒の病態を考慮した系統的・体系的なキャリア教育を位置づけ、その充実を図る。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・つけさせたい力を確認することで、将来の自立に向けて、今取り組むことは何か考えるきっかけとなった。 ・それぞれの学年で進路指導を丁寧に行った。進路指導年間計画も参考にしながら取り組むことができた。	B	・キャリア教育の全体計画等を作成し、児童生徒の指導計画に生かす事ができた。来年度も系統的な進路学習を職員間で共通確認の上行う。 ・児童生徒が主体となる実行委員会の取組みを継続する。
		保健教育や道徳教育を通して、自他を大切にすることを育て、基本的な生活習慣を身につけさせる。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・道徳教育全体計画を作成し、様々な場面での道徳教育を心がけた。 ・愛校作業に取組み、学習・生活環境に対する意識や社会性を高めることができた。		
3	病弱児教育に関する専門性の充実を図り、信頼される学校づくりを行う。	積極的な情報発信を行い、病弱児教育への理解と啓発に努めるとともに、関係機関との連携を充実させる。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・病弱児協働協議会は、市町村教育委員会の理解協力のもと運営が実施できた。 ・病弱学級担当者の連携強化、資質向上に向けた取組は、参加者や助言者、連携推進委員からもさらなる連携強化を希望されている。	B	・病弱教育が変化の中で、社会からより広くより高い専門性が求められる。学識・医療・福祉関係者とのネットワークを強化し、参加者のニーズや状況に応じた研修会の実施や情報提供を行っていく。 ・事業については浸透しつつあるが、担当者が変更になることもあるので来年度も周知に取り組む。 ・来年度も高校教育課には支援検討会に出席していただき、高校への助言をお願いするとともに、高等学校及び関係機関と連携をしながら、迅速で適切な支援を実施していく。
		教育委員会による「高校生こころのサポートルーム活用事業」により、本校が高校生こころのサポートルームの運営主体となったことに伴い、関係機関及び高等学校との連携をさらに深め、相談支援の充実にも努める。	児童生徒・保護者アンケート、学部会での検証(満足度80%)	・今年度より高校生こころのサポートルームの運営主体は本校となり、各機関へ周知を積極的に行った。 ・在籍校や関係機関と情報共有し、生徒支援に直接あたる教員の理解を深め、教員の支えに繋げることができ、事業の目的達成に貢献した。また高校の相談支援体制の構築や充実につながった。		

学校関係者評価	
実施日(平成29年2月21日)	
評価	意見・要望等
3.7	・児童生徒・保護者アンケート結果から、学校の教育活動が高い評価を得ていると思った。 ・学校評価等で示された学校としての長所(成果)を教職員間で共有し、長所から見えてくる学校のあり方を全教員で検討する機会を設けられるとよいと考える。 ・合理的配慮に関して、職員への徹底をはかってほしい。 ・個別的教育支援計画の作成について、高校とも先生方の不満になっているのか。活用されていない理由は何だろうか。その問題を考えた方がよいと思う。 ・ICTに関わって、機材の充実にも取り組んでほしい ・教員間の不公平感の軽減が必要ではないか。 ・教員間の相互コミュニケーションがもう少し図れるとよいと思う。
4	・キャリア教育の内容が様々な指導形態で取り扱われており、有意義であると思いました。その成果と課題を外部発信する際に強調されるとよいと思う。 ・他校の研修会で情報モラルに関する教育について話題が出たことがある。富士見支援学校ではどのような取組をしているのか、ぜひ取り組んでほしい。
3.7	・教育については、しっかりできていると思う。 ・中央病院退院時に転院先の院内学級や、通っていた地域の学校と密に情報交換やカンファを開いていただきとても助かった。 ・学習サポートをしてもらうことで、入院中の子供たちが変わっていく様子が大変よいと思っている。医教連絡会での情報交換を大切に、医療と学校との連携を密にしていきたい。よりよい変化を目指して、問題提起をお願いしたい。 ・「こころサポ」は心理士の増員や私立高校への対応を期待している。 ・サポートルームに関しては、中学校での不登校から私立高校へ入学するケースも多く、私立高校の生徒にもこの制度が使えるようお願いする。 ・病弱児教育の理解・啓発のためのモデル(手続きや内容、システムなど)を構築されていくことを期待する。

留意点 (1)重点目標と評価項目については、各学校の現状と課題に基づき、実情に合わせて重点化し、設定する。

(2)学校関係者評価については、年度当初に今年度の重点目標の現状と具体的な対策を説明し、評価に必要な情報提供を計画的に行う。学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価委員会等を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。